慶長七年九月、藩主佐竹家国替えの折、北又七郎佐竹義廉が前北浦を治め、長野紫嶋城に入ったことはいろいろの文献に残されている。

紫嶋城の名についてはそれ以前長野字紫嶋（地名）に紫嶋某という豪族がおり、この地に仁政を敷き、深く村民の信頼を得ていた。そして慈恩寺の復興に力を尽くし、秋田城介殿も代々も慈恩寺に帰依し、六世代了解のとき秋田氏より紫嶋山慈恩寺の寺号を賜った。佐竹国替に当たって紫嶋氏は自ら慈恩寺にうつり館を佐竹義廉に提供した。それから村人たちは佐竹家を迎えた紫嶋の館を「紫嶋城」とよんだ。それから四五年、紫嶋城は佐竹北家の居城として前北浦地方を治め、明暦二年（一六五六）八月、芦名家断絶によって前北浦・奥北浦を統治するため角館に移された。

紫嶋城跡には、今なお二色のあやめが咲き一の坪の地続きの地名とともに城内庭園のありさまを語り、あしげ渕は名馬のことが語られ、茶畑の地名は城中の茶を自給するため茶が移し植えられ、そのまま地名になったなど語り伝えられている。今なお除籍には紫嶋蔵松、紫嶋豊治などが残されているが、その後孫であったかも知れない。歴史と伝説は深いかかわりをもっている。